嗅上皮の再生におよぼす神経成長因子の影響

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三輪, 高喜, Miwa, Takaki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00066598

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

嗅上皮の再生におよぼす神経成長因子の影響

研究課題

サマリー

研究課題/領域番号

05771310

研究種目

奨励研究(A)

配分区分

補助金

研究分野

耳鼻咽喉科学

研究機関

金沢大学

研究代表者

三輪 高喜 金沢大学, 医学部・附属病院, 助手 (20229909)

研究期間 (年度)

1993

研究課題ステータス

完了 (1993年度)

配分額 *注記

900千円 (直接経費: 900千円)
1993年度: 900千円 (直接経費: 900千円)

キーワード

神経成長因子 / insitu hybridization / 嗅神経

研究概要

抗NGFR抗体を用いた免疫組織化学的手法により、嗅上皮の再生にはNGFRが関与していることが証明されたが、NGFの免疫組織化学法はなかなかうまくいかなかった。そこで、マウスNGFcDNAを用いたinsituハイブリダイゼーション法により嗅覚系におけるNGFの発現を観察した。
用いたプローブはマウスNGFcDNAの一部である340bpを含むプラスミドDNAのpmNGF102である。このDNAにニックトランスレーション法を用いてビオチンを

標識して使用した。標本は成熟雄マウス及びラットの顎下腺、嗅球、嗅上皮で、顎下腺は正常コントールとして用いた。固定液は4%パラフォルムアルデヒドを用いた。凍結切片でマウス顎下腺、嗅球で陽性所見を認めたが、マウス嗅上皮及びラットの組織では反応が弱く判定不能であった。また、パラフィン切片では反応は全く認められなかった。手技的にはプロテイナーゼK処理及び塩酸処理は必須であり、それらを行わない場合陽性反応は認めなかった。また、ハイブリダイゼーションの時間及び条件としては20時間、37度で最も良好な結果を得られた。15EA03:今後の検討課題は次の4点である。1)嗅細胞の再生時、発生発達時のNGFの発現の有無を観察する。2)パラフィン切片でも観察できるような処理法を検討する。3)NGFRの免疫組織化学との二重染色。4)insitu ハイブリダイゼーションの電子顕微鏡への応用。

報告書 (1件)

1993　実績報告書

研究成果 (1件)

すべて　その他

すべて　文献書誌 (1件)

[文献書誌] T.Miwa etal: "Trasection of the olfactory neives induces expression of nerue grawth factor receptor in mouse olfactory epitheliam" Neuroscience Letters. 155. 96-98 (1993)

URL: https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-05771310/

公開日: 1993-03-31　更新日: 2018-06-07